

# 米沢市林泉寺墓地における 墓標の変遷と階層性

北野 博司

KITANO Hiroshi

大風 雅明 OKAZE Masaaki 大嶋 侑暉 OSHIMA Yuki

門脇 明保 KADOWAKI Akiho 後藤 篤人 GOTO Atsuto

後藤 達也 GOTO Tatsuya 佐藤 宏平 SATO Kohei

三浦 望 MIURA Nozomi

# 米沢市林泉寺墓地における墓標の変遷と階層性

Changes and hierarchy of tombstone in Linsen-ji cemetery

北野 博司 KITANO Hiroshi

大風雅明 OKAZE Masaaki・大嶋侑暉 OSHIMA Yuki・門脇明保 KADOWAKI Akiho・後藤篤人 GOTO Atsuto  
後藤達也 GOTO Tatsuya・佐藤宏平 SATO Kohei・三浦 望 MIURA Nozomi

## 要 旨

本稿は米沢藩上杉家の菩提寺－春日山林泉寺の墓標調査を基にした小論である。林泉寺には藩主夫人や子女の墓、享保4年(1719)に成立した米沢新田藩・駿河守家の墓がある。また、直江兼続夫妻、高家衆の武田家、畠山家、二本松家、侍組の長尾家や三股家といった有力家臣家の墓地があり、米沢を代表する近世寺院墓地である。上杉家、家臣団の墓地を中心に408基の墓標を調査した。

上杉家では最上位の藩主廟墓(木造堂舎内に大型五輪塔安置)を頂点とし、夫人・子女、駿河守家は石造堂舎型+小型五輪塔、家臣団は石造万年堂+小型五輪塔と、身分と墓標形式に明瞭な差異があった。藩主夫人でも藩政初期には景勝正室や定勝正室は笠塔婆(笠付角柱)を採用していた。家臣団墓地では17世紀代に万年堂が普及し、藩内の家格・石高等によりサイズ別の使い分けが認められた。特大サイズの万年堂は家の始祖を祀る形で墓地の中央に置かれ、藩主墓の配置原理にも似て左右に横一列に拡大していくパターンが認められた。その延長で横長(鐵家、朝岡家など)と縦長(武田家、長尾家など)の2種類のコの字形配列があった。

18世紀後半から棹石が板状や角柱状を呈する小型墓が普及し、19世紀にはその主流が万年堂と置き変わつていった可能性を指摘した。

キーワード:近世墓地 上杉家 上杉家家臣団 階層性 石堂 万年堂

## 望1. 遺跡と調査の概要

### (1) 調査の経緯と経過

東北芸術工科大学歴史遺産学科では地域の歴史遺産の保存・活用を学ぶためフィールドワークによる実践的な学習を重ねている。本調査は2018年度前期の授業「フィールドワーク演習3」の一環として実施し、北野ゼミの3年生7名が参加した。米沢市林泉寺一丁目の「春日山林泉寺」にある墓地の基礎

資料を収集するのが目的である。現地調査は2018年6月23・24日、6月30日、7月1日の4日間とし、後期に調査データのとりまとめと補足調査を行って本報告をまとめた。現地調査は日数が限られており、戒名の読み取りなど不十分な点もあるが、ここでは中間報告として掲載することとする。

なお、7月7・8日には「歴史遺産調査演習A」の授業で1年生7名(遠藤鈴香・佐藤大輝・晋道美和・峯田太樹也・目黒智啓・八島千里・渡邊美緒)が調査に参加した。



第1図 林泉寺の位置



第2図 写真図版見本

No. 林泉寺墓地墓標調査カード			調査年月日① 調査年月日②	記録者① 記録者②	備考	
エリア	A	B	C	名前	年号	直江兼続 花熊岩・安山岩・他 灰色・黄色・赤色・不明
形式	五輪塔 文字			直江兼続 花熊岩・安山岩・他 灰色・黄色・赤色・不明		
家形塔婆(堂合型)	宝形 入母 平	その他( )	五輪塔 一石・別石 有( ) 基	直江兼続 花熊岩・安山岩・他 灰色・黄色・赤色・不明		
家形塔婆(万年型)	宝形 五輪塔 一石・別石 有( ) 基					
笠付板状・角柱	宝形 入母 有( ) 基	平	青株 有( ) 基			
板状	樹形 角形 駒形	板脚	その他			
角柱	平頭 尖塔(四棱)	角柱頭 円頭	不明 その他			
有像(先背付)	地蔵	その他( )				
自然石						
法量	笠(辺×底×高さ)	x	x	cm	備考	
全高	頭(辺×底×高さ)	x	x	cm		
cm	基壇( 段)	x	x	cm	頭(有・無)	
cm	基壇( 段)	x	x	cm	m	
付属物	灯籠 基 経文				直江兼続の墓 灰色・黄色・赤色・不明	
	供物台、木隠、花立等				花熊岩・安山岩の墓 灰色・黄色・赤色・不明	
略図・写真	 <p>スケッチ</p>					
	 <p>2018.6.14撮影</p>					

第3図 調査カード見本

現地調査およびデータの整理は記録(大嶋侑暉・門脇明保・後藤篤人・三浦望)、測量(大風雅明・佐藤宏平)、写真(後藤達也)の各班で分担し、北野が総括した。記録班は墓標単位で調査カード(第3図)に記入し、エクセルファイルで集計した。測量班は現地に任意の基準点を設置し、トータルステーションで墓標の位置を計測し、配置図(第12図)を作成した。写真は各墓標につき、正面・背面・両側面・頂部等を撮影し、1墓標ごとに4枚組(正面・背面・両側面)の写真図版を作成した(第2図)。今回は紙数の関係で、墓標一覧表や写真図版は割愛した。

## (2)林泉寺の概要

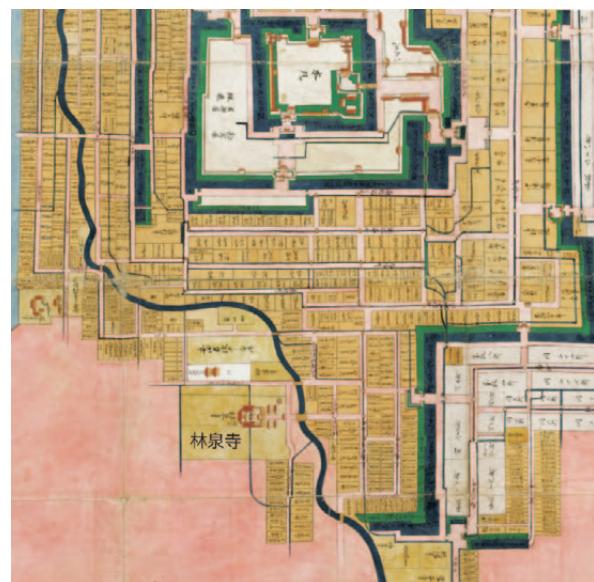
曹洞宗春日山林泉寺は、明応5年(1496)に越後守護代長尾能景(謙信の祖父)が亡父の遺徳を後世に伝えるため春日山(新潟県上越市)の麓に一字を建立したのがはじまりとされる(菊池1983)。長尾家の菩提寺であった林泉寺は景虎が上杉家を継いだことにより上杉氏の菩提寺<sup>(1)</sup>となり、その後、景勝の会津・米沢転封に伴って移転し、元和3年(1617)に現在地に堂塔伽藍を建立したという。

林泉寺は米沢城跡の南方、城下町の南端に位置する。寺域の東に隣接して直江兼続が城下町の防御と水利とを兼ねて整備したという「堀立川」がある。堀立川は松川上流の猿尾堰で取水し、城下町西側を貫流した後、再び松川に合流する。林泉寺の本堂および参道は東に向いており、山門の先にはこの堀立川と木橋があった。享保10年(1725)の「御城下絵図」では木橋の先の武家地に「林泉寺門前町」の記載がある(第4図)。享保10年と文化8年(1811)の城下絵図では本堂前面の建物配置は異なるが、ともに寺域中央に南から北へ流れる水路が描かれている。これは現在も墓所西側に接して存在する溝であろう。

現在の本堂は享保17年(1732)の火災後、元文5年(1740)に再建されたことが棟札から明らかである。山門は明治41年(1908)、家老竹侯家の薬医門を移築したものである。平成5年、茅葺きから銅板葺きに改修された。

墓地は本堂・参道の南側にあり、現在は「上杉家廟所」「上杉家墓所」として木柵で囲われ、家臣らの墓地とは区分されている。初代藩主景勝の夫人菊姫(武田信玄四女)や歴代藩主の夫人、子女の墓がある。家臣では直江兼続夫妻や武田信清(信玄六男)の墓地があり山形県指定史跡となっている。信清は寛永19年(1642)に死去した。

『米沢春日山林泉寺記』によれば、荒廃していた林泉寺が昭和10年代、戦後の改修工事で復興をとげ、昭和35~40年にかけて境内に3,500本の杉が植林された。昭和39年の新潟地震による被害は甚大だったが、その後復旧した。昭和54年に境内南東部に第1期新墓地造成、平成元年には境内西部に第2期新墓地造成が行われた。平成10年には上杉家墓所の前に



第4図 御城下絵図(享保10年) 米沢市上杉博物館蔵

「ふれあし観音」が竣工。平成19年にはNHK大河ドラマ「直江兼続」放映(平成21年)決定を受けて、直江墓所などの環境整備事業が行われた。

現在、墓所は宗教法人春日山林泉寺の管理となっているが、平成30年に上杉家墓所や主要家臣墓群の適切な保存活用と史跡指定を目指すために「上杉家墓所保存会」が組織されたところである。

## 2. 林泉寺墓地の調査

### (1) 調査対象範囲

林泉寺には藩主上杉家ゆかりの墓地とこれらを取り囲むように家臣らの墓地がある。また、近代以降に造立された子孫の墓標、分家の墓地、歴代住職の墓地、現代の分譲により成立した新墓地がある。

今回の調査では上杉家墓地と家臣団墓地のエリアを主たる対象とし、これに凝灰岩製墓標が存在するエリアを加えている。この中には近現代の花崗岩製墓標も含まれるが、区別はせずに一括で調査対象とした(第5図)。

調査を実施するあたり対象地域を4地区に分けた。

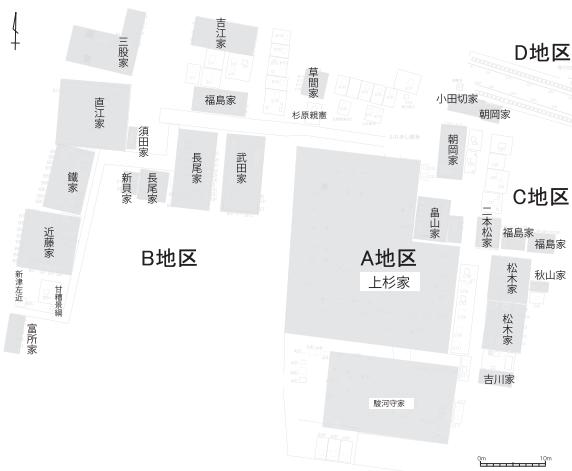
**A地区** 北半は米沢藩主上杉家の墓所、南半は享保4年(1719)に分家した米沢新田藩上杉家(駿河守家、支候家)の墓所である。以下では前者を藩主家墓所(A1地区)、後者を駿河守家墓所(A2地区)と呼ぶ。

**B地区** A地区の西側、北側の家臣団等の墓地

**C地区** A地区の東側の家臣団等の墓地

**D地区** A地区の北東にある歴代住職の墓地

今回調査した墓標はA地区56基、B地区173基、C地区121基、D地区58基、合計408基である。



第5図 林泉寺墓地の配置図



第6図 A地区調査風景（南から）



第7図 B地区武田家墓地（東から）



第8図 C地区畠山家墓地（北西から）



第9図 D地区歴代住職の墓地（西から）

## (2) 墓標の分類

林泉寺の墓標は大きく二つに分けられる。第1は石製の堂舎内に供養塔などを収納するもの、第2は角柱状・板状の切石、自然石などの棹石を基壇上に設置するものである(第10図)。

前者は「石殿」「石堂」「ラントウ」「廟墓」「ミヤボトケ」など、地域毎に様々なに呼ばれてきた(水谷2009、池上・池田2015)。ここでは原形が木造の堂舎、仏殿に由来するとみられることから石造物を指す場合は「石堂」と呼称する。林泉寺では石堂形式に2タイプがある。

**堂舎型** A地区にのみ存在し、すべてが凝灰岩製である。木造堂舎の意匠をもち、屋根は「宝形」形態とする。内部には一石五輪塔を置くのが一般的で、別石五輪塔(A23)やその他(A4)の例もある。米沢藩主上杉家墓所の廟屋建築は入母屋造りないしは宝形造りで、内部に大型の別石五輪塔を置く。これを石製とし、小型化した形式ともいえる。

笠は方形平面の頂部に露盤と宝珠を置く。笠・露盤が一体で、上部に別造り宝珠をのせるものが多く、ほかに笠の上に別造りの露盤・宝珠をのせるもの(A12)や特殊な例(A35)がある。笠は頂部に膨らみをもち、隅棟がS字状の曲線を描くもの(A7)と、隅棟が露盤から弓なりに反るもの(A12)がある。

胴は一石の内部を刳り抜いたもので天井・底はない。正面には方形の窓があり、A1地区では木製の格子窓がはめ込まれている。現存するものは後補材であるが、窓の側面に枠を固定する突起があることから、当初も類似のものがあったとみられる。A23は木瓜形の窓の前面に方形の格子枠をはじめ込む。四周の壁厚は8~10cm前後を測る。四隅には円柱、下部に土台、上部には梁材を表現する。正面と両側面はすべてこの意匠とするが、背面は建築材の表現を省略するものが多くない。基礎は一石で蓮華座を表現する例(A12)や切石を組む例(A16)がある。

**万年堂型** 石堂形式で、胴は建築材等の表現がないシンプルなものである。屋根は入母屋が最も多く、寄棟、宝形もある。入母屋や寄棟では棟の上部が平坦なものと丸いものがある。入母屋では破風飾り(懸魚や六葉など)や鬼瓦の表現にバラエティーがある。屋根の向きは平入りが多いが、大型品では妻入りもある。

胴の正面には格子窓が彫り込まれ、縦×横3列の9個が基本である。置賜地域に広く普及し、「万年堂」として親しまれている。内部には一石五輪塔を納める。大型品では別石五輪塔とするものもある。



第10図 墓標の分類

**五輪塔** 空輪・風輪・火輪・水輪・地輪からなる大型品。それぞれ別石を組み合わせるもの(B13)、空風輪を一石とするもの(C52)、空風火輪を一石で作るもの(C4)がある。禪宗の公案「祖師西來意」や梵字(種子)、「空風火水地」が刻まれている。近現代のものは花崗岩製で2段程度の基礎の上につく。

**笠付板状・角柱** いわゆる笠塔婆で板状・角柱墓標の上部に笠が付く。笠は宝形(A6・A10)、向唐破風(C58)、宝形・軒唐破風(B172)、入母屋(B53)がある。笠付角柱のA6・A10は頂部には大きな宝珠があり、屋根は隅角の反りが大きい。笠付板状は一般の櫛形(板状)墓に対して棹石の背が高く、現状では頂部に笠のないもの(B145、C47)が目立つが、類似形状で頭部に笠がのるもの(C48)や笠をのせる加工があるもの(C49)があることから本形式に括する。

当地では雪の影響で笠石の脱落や凍結破碎による石材劣化が進みやすい。現状で残る笠についても、造立当初のものが残存しているとは限らない。万年堂の屋根と同じ形態のものもあり転用の可能性もある。

**板状(櫛形)** 棘石の断面が長方形で、頭部はいわゆる櫛形を呈する。基礎は1~2段で、角柱に比べると背が低い。

**角柱** 棘石の断面が方形に近いもの。頭部は尖頭(頂部から四本の稜線)、角台頭、平頭などがある。角台頭はその造りにバラエティーがある。基礎は2~3段で板状より相対的に高い。

なお、板状と角柱の棘石は断面寸法の比で明瞭に分かれることはない。板状で頭部が尖頭のものや角柱状で櫛形

を呈するものがある。

**有像舟形** 地蔵等を陽刻した小型の墓標。舟形光背を有する。

**自然石** 安山岩等の玉石を加工せず使用するもの。基礎は凝灰岩の切石を用いるものが多い。

**自然石舟形** 安山岩等の自然石の片面を平らに加工(研磨)し、文字を刻む墓標。

**その他** 板状墓標の正面に仏像を陽刻する「箱仏」(B28)、柱状節理の「材木石」を利用した墓標(C54)、片岩などの扁平な板石を用いた墓標(C122)、現代の「洋型」とされる墓標(B151、B162)を一括した。

### (3) 墓標の石材

林泉寺墓地で用いられている主要な石材は凝灰岩、花崗岩、安山岩である。凝灰岩は主として江戸～明治期に利用された石材である。米沢市は凝灰岩質の石材が豊富で、これまで約10か所の採掘跡が確認されている(米沢市教委御教示)。石切丁場跡は市街地の東部～南部(長手～万世町)に集中する。これらは大正6年(1917)、8年(1919)と続いた米沢大火の復興にも貢献した。西部では戦後まで採掘が続いていた「成島石」がある。南部では赤味がかった「赤崩石」が産出する。これは林泉寺の参道敷石や墓標、灯籠にも利用されている。林泉寺に供給された凝灰岩の色味は赤色のほか、黄色、灰色、緑色と多彩である。意識して使い分けされたと考えられる例(A34～36)も存在する。

石堂内に安置される凝灰岩製五輪塔は黄色味を帯びた泥岩質の精製品と火山礫を含む粗製の2種がある。

花崗岩は明治後期から使用が始まり、大正、昭和と増えていった。地元産(金山石)と市外、国外からの搬入品があるが詳細は不明である。

安山岩類はほとんどが玉石(円礫)で松川等から採取したものとみられる。大きな自然石の片面を平らに加工・研磨したタイプの墓標にも用いられている。

## 3. 調査の成果

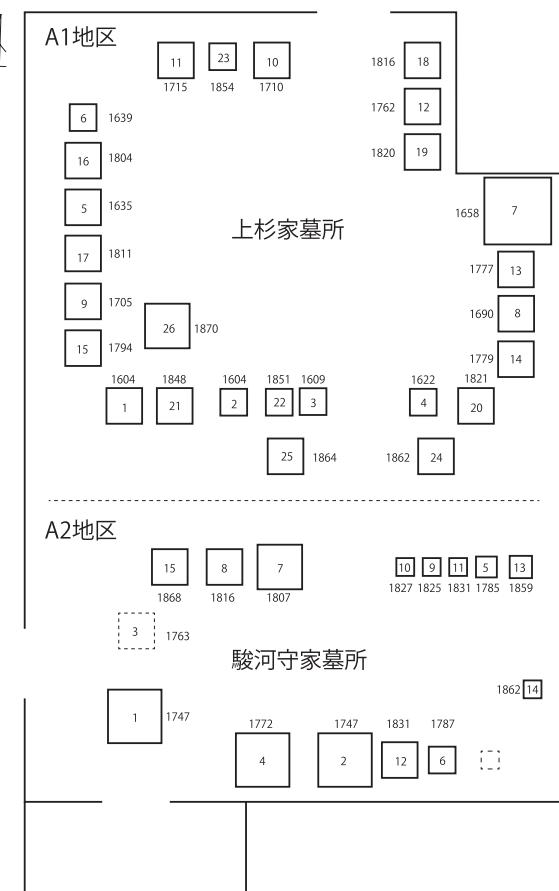
### (1) 上杉家墓所の墓標の形成過程

『米沢春日山林泉寺記』(菊池1983)に基づき、それぞれの没年と墓標の配置<sup>(2)</sup>を検討してみたい。なお、墓地は墓標・地下遺構だけでなく、墓標が乗る基壇、供物台や花立、灯籠、参道等を区画する玉石列など、複数の遺構・遺物で構成され

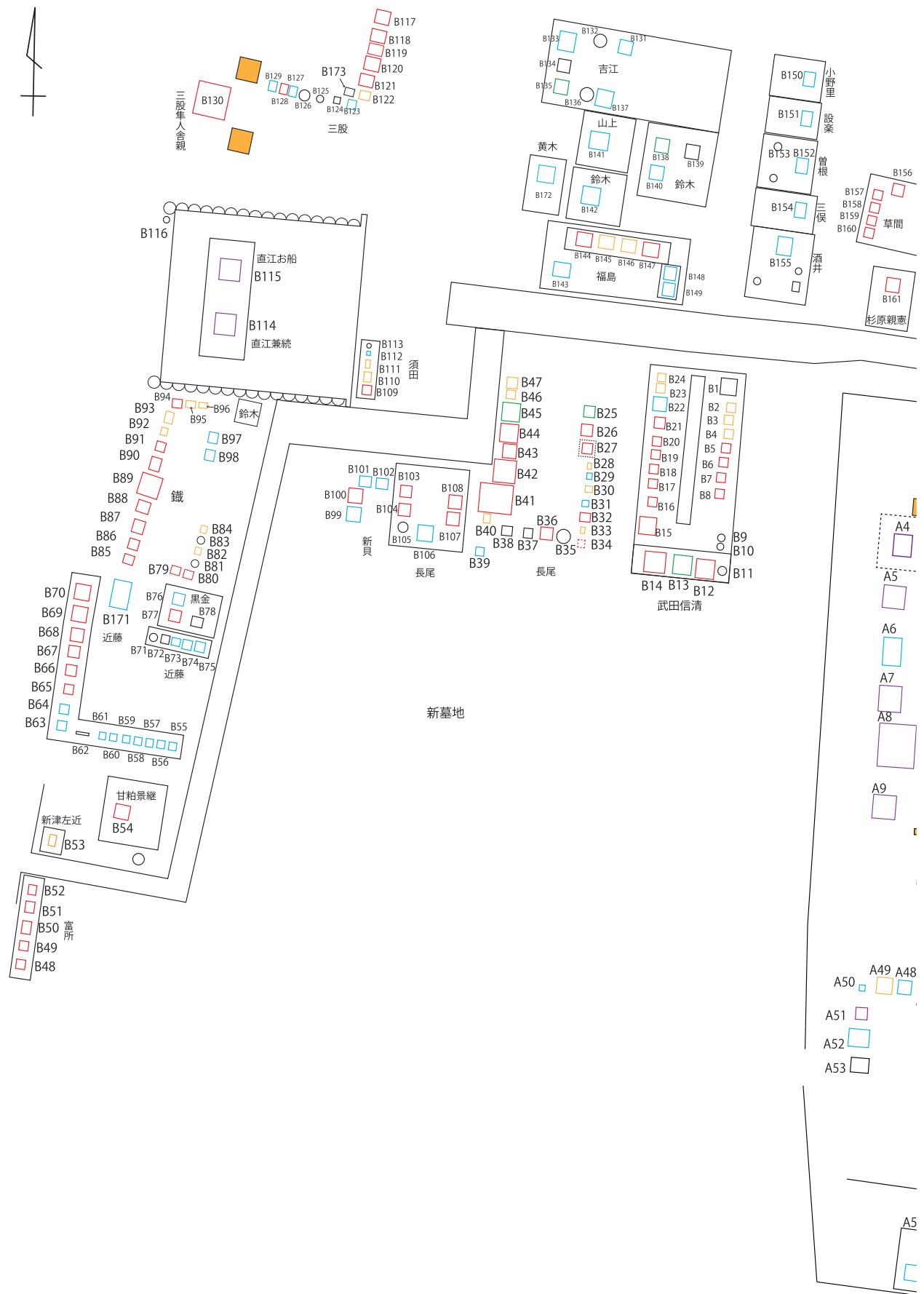
ている。今回は墓標のみの検討にとどめることとする。

没年が最も早いのはA10 初代景勝正室菊姫(1604)で、その後A12初代景勝後室(1604)、A14初代景勝実母仙洞院(1609)、A18初代景勝実姉畠山(上條)弥五郎内室(1622)と南辺に1基分おきに規則的に並ぶ。次いで、西辺のA6二代定勝正室(1635)、1基飛ばしてA4二代定勝子(1639)、東辺に移ってA23 三代綱勝正室(1658)、A21四代綱憲子(1690)と規則的な配列パターンで造墓が続く。次いで空間のあった西辺にA8四代綱憲子(1708)が埋まる。これによって墓標はコの字形となり、北に開かれた墓域の基本構成が完成した。その後は北辺に移ってA3五代吉憲子(1715)、A1五代吉憲側室(1720)が造立され口の字形の配列となる。遅くともこの頃までには南北の参道と4辺を巡る墓道が形成されたとみられる。

この後、米沢新田藩(駿河守家)の墓所が藩主家墓所の南側に新たに設定された。藩主家墓所と同様に、南辺から始まり、A52勝延室(1747)、A50駿河守勝周(1747)の墓地が造られた。最終的にはA1地区同様口の字形になっていく。



第11図 没年順にみたA地区の墓標配置





藩主家墓所は北東角が鉤形に折れて入り込んでいる。方位から見て鬼門封じの可能性がある。北辺の後は、北東隅にA25八代重定女が置かれ、その後はこれまでの墓標の間を埋めるように造墓が進み、最終的には南辺のさらに南にA16・17の2基が置かれ、すべての辺に隙間がなくなった後は、内側にはいって西端にA15(1870)が造られた。

このようにA地区の墓標の配列、進行には一定の規則性が認められることから、近現代に大規模な改変を受けた可能性は低いと考える。林泉寺由緒では当地で伽藍整備を始めたのが元和3年(1617)とされており、これに従えば没年がより古いA1地区南辺の墓標はそれ以降に造営されたことになる。造成を開始した時期は不明ながら、その段階では墓域の南辺に始祖を置き、西から東へ配列していくという方針があったことが窺える。

なお、慶長9年(1604)に亡くなったA12景勝側室桂岩院(二代定勝母)は林泉寺に埋葬された後、寛永6年(1629)に浄土宗極楽寺に改葬されたとされる(『上杉家御年譜』)。また、現在のA14仙洞院墓は明治41年(1908)の300回忌にあたり新規に造立されたものであり、当初の墓標形態は不明である。

藩主家墓所では明治3年(1870)で造墓が終了するが、駿河守家の西側では明治期以降も墓標が建て続けられた。南東角のA44<sup>(3)</sup>・45、西側のA27~33である。

また近年、南西端に新たに柵で区画された墓域が造られた。平成20年に2基、平成30年に1基、上杉家の子孫により墓標が建てられている。

## (2) B地区の家臣団墓地

B地区には直江家、武田家、長尾家など、重臣クラスの墓地が存在する。近現代の墓地整備により基壇や参道に石敷きを施した墓地が多い。長尾権四郎家や三股家、鐵家、新見家の墓地には基壇はなく旧状を留めている。

### ア. 直江家(B114・115)

墓地は本堂の南側にあり東面する。A地区の北入口を西に折れると参道の正面に直江墓がある。以下では「直江墓参道」と仮称する。昭和28年山形県指定史跡となる。

上杉家の執政として内政・外交に活躍した直江兼続は元和5年(1619)、おせんは寛永14年(1637)にそれぞれ江戸屋敷で亡くなり、直江家の菩提寺である米沢の徳昌寺に埋葬された。徳昌寺はその後、直江家臣と藩主側近との権力争い、林泉寺と触頭をめぐる争いに敗れ、越後守板に帰ったため夫妻の墓は林泉寺に移された(『米沢市史』第2巻)。

墓地は間口8.7m×奥行10.0m、石柵で囲まれた盛土基壇上に、4.60×2.45mの内基壇を設け、凝灰岩製の石堂2基を並置する。外基壇に対して墓道入口および内基壇は北に偏っている。石堂は左が兼続、右がおせんのもので、内部にはそれぞれ別石五輪塔1基<sup>(4)</sup>を納める。

現在の墓地は大正8年(1919)の没後300年祭の時に整備された。この時には石柵を巡らせ、2基1対の灯籠を2組、ほかに手水鉢などを整備している。正面の花崗岩製灯籠は市制70周年(昭和34年)の修理に伴うもので、大正8年以降の絵葉書ではブロンズ製の灯籠が映る。大正8年を廻る古写真(第14図)とその後の写真を比べると基壇の形状がかなり違っている。墓域左下には万年堂1基がみえる。これらの古写真にはおせん墓の前にも松が映るが今は無い。直江墓は没後たびたび紀年祭が行われており、林泉寺移築当時の姿をうかがい知ることはできない。

2基の石堂はほぼ同大、同巧の製品である。笠は肉厚な宝形造りで、胴は90cm(3尺)四方、高さ100cmを測る。建築表現は背面にもあるが、全体に形骸化しており、堂舎型が丸みを帯びた柱を表現するのに対し本例はそれがない。正面には直江家の家紋とされる「三つ盛り亀甲」をあしらった透かし窓がある。基礎は1石造りである。



第13図 現在の直江家墓地



第14図 絵葉書にみる直江家墓地（大正8年以前）  
東北芸術工科大学蔵

直江墓の石堂は胴や笠の作りが堂舎型と類似する。しかし、建築意匠の形骸化や正面が透かし窓という点で両者は相違している。17世紀前半に遡る堂舎型でこのサイズのものはみられない。本例は堂舎型、万年堂型の両要素を合わせ持つ特異な存在であり、大名クラスの家臣だった直江兼続と上杉家の関係を反映したものとみることもできよう。

#### イ. 武田家(B1~24)

直江墓参道の南側でA地区に最も近い位置にある。甲斐武田家滅亡後、高家衆の筆頭として上杉家に仕えた米沢武田家の始祖信清(武田信玄の六男)の墓があり、県指定史跡となっている。信清は寛永19年(1642)に亡くなっている。地輪に戒名等が刻まれる。墓標は切石で囲われた区画にコの字形に配置される。正面はさらに一段高くなり、中央に大型五輪塔B13(信清墓)、その両脇に万年堂B12・14がある。全体では五輪塔1基、万年堂13基、角柱1基、板状5基、自然石1基、有像3基、計24基。

#### ウ. 長尾家(B25~47)

長尾権四郎景広を祖とする長尾家の墓地である。景広は上州白井出身で景勝に仕え、米沢に移ってから1,000石、大坂の陣後には2,000石に加増され侍頭を務めた。寛永7年(1630)に亡くなっている。ここではエの長尾家と区別するため権四郎家としておく。武田家同様コの字形に配列されるが、南辺は自然石3基で際立った正面性はない。大型の五輪塔2基と万年堂がある。五輪塔は東列B25と西列B45で、それぞれ元文元年(1736)、元禄15年(1702)の年号銘を持つ。大型万年堂B41は入母屋妻入りで、内部には精製の別石五輪塔を納める。万年堂B42~44の3基は宝形造りである。全体

では五輪塔2基、万年堂8基、角柱5基、板状4基、自然石3基の計22基。文政年間は板状だが、弘化、天保、慶応年間には角柱に変化している。B28は板状・木瓜形頭部の箱仏である。

小貫幸太郎氏の写真(米沢市上杉博物館蔵)では西列の前面に切石列の区画があるが、現在ではみることができない。  
エ. 長尾家(B103~108)

長尾権四郎家の西にあるB103~108。コの字形配置で南正面に花崗岩製の角柱(昭和12)があり、東西列に万年堂が2基ずつ並ぶ。万年堂B104内の一石五輪塔の地輪に「天和三年」の年号銘がある。万年堂4基、角柱1基、有像1基の計6基。

#### カ. 新貝家(B99~102)

墓標は2基が東面、2基が南面する。万年堂1基、板状1基、角柱2基の計4基。B99は昭和55年に改修されている。

#### キ. 福島家(B143~149)

墓地は直江墓参道の北側で、武田家、長尾家と対面する位置にある。万年堂2基、笠付板状2基、角柱2基、洋型1基の計7基からなる。コの字形配置で正面に笠付板状墓(笠脱落)2基があり両脇に万年堂をおく。昭和49年に叙勲記念で墓地整備が行われている。西袖にはこの時の花崗岩製洋型墓標と墓誌、東袖には大正期の花崗岩製角柱2基を置く。笠付板状はB145が享保3年(1718)、B146が延宝4年(1676)の年号銘を持つ。

#### ク. 水原常陸介親憲(B161)

親憲は会津時代に猪苗代城代をつとめた重臣で、米沢では侍組、1,833石余を得た。墓地は直江墓参道の北側にあり、胴の前面が欠落した万年堂が1基存在する。元和2年(1616)に亡くなった杉原常陸守親憲の墓とされ、昭和62年、ゆかり



第15図 古写真によるB地区西側墓地 米沢市上杉博物館蔵 小貫幸太郎氏撮影

の新潟県水原町の有志により整備されたことが墓碑に記されている。万年堂が正面を欠いているのは、親憲の墓石がオコリ（熱病）に効ありと人々が削り取ったことによると言えられる（菊池1983）。

ケ. 三股家（B117～130）

西奥に三股隼人吉親の墓とされる大型の万年堂B130があり、正保3年（1646）銘の層塔が2基一対で立つ。吉親は2代定勝の死去（正保2年）に伴い殉死したとされる。大型の万年堂B130は東面し、入母屋造り平入り。内部には泥岩質の別石五輪塔1基が立つ。

北側の塔の前面には万年堂1基、板状1基、角柱2基、自然石1基、有像2基があり、さらに北にL字形に折れて、板状1基、万年堂5基がある。B117には陽刻五輪塔が入る。B118の胴には文久2年の年号銘がある。本群はB119～121に基礎がないうえ、B120の胴が倒立している（「六月三十日」の文字が逆さ）など、風化、欠落が著しい。B122の背面に自然石が1基倒れしており、本墓域では計15基があった。

コ. 須田家（B109～113）

須田家は侍組に属した。直江墓の南側に接し、東面する。万年堂1基、板状2基、有像1基、その他1基の計5基からなる。B112は直江墓の外柵に使われている石柱と同工品の転用である。

サ. 鐵家（B79～98）

黒金（のちに鐵）家は侍組に属する。墓地は直江墓に南接する位置にあり、東面する。孫左衛門泰忠は会津神指城普請の総奉行を務め、米沢では2,066石余を得ている。大坂の陣にも出陣した譜代の重臣で、寛永12年（1635）に亡くなった。万年堂10基、板状6基（うち1基は笠付か）、角柱2基、有像2基の計20基からなる。墓標は西辺中央に入母屋妻入りの大型万年堂B89を置き、その両脇に中小の万年堂を配置する。B89は泰忠の墓とされ、中には精製の別石五輪塔1基が納められる。

本墓地は西辺を正面とし、コの字から口の字へ移行するような配列となっている。17世紀代から万年堂を西側に配列し、19世紀前半になると板状（北・南東）が出現し、明治になると角柱（北東）へと変化している。

なお、小貫氏の写真ではB98の東に万年堂1基と板状1基が写るが現在はない。

シ. 黒金家（B76～78）

東面する墓地で、万年堂1基、角柱1基、自然石1基の3基からなる。万年堂B77の胴には「明治十四年」の銘がある。後刻

の可能性もあるが、万年堂の下限を知る資料である。自然石は天明3年の年記がある。

ス. 近藤家（B71～74）

南面する墓地で、角柱3基、有像1基、自然石1基からなる。角柱には天保9年（1838）、自然石には明治4年（1871）の銘がある。

セ. 近藤家（B55～70）

東面する墓地で、西辺と南辺にL字形に墓標を配置する。正面（西辺）に万年堂6基、角柱2基を置き、南辺の角柱7基とあわせて15基からなる。北側に大型万年堂B69、B70の2基があり、順次南に向けて造墓が進んでいったことが窺える。大型の2基はとともに寄棟で、それぞれ「空風火水地」、「祖師西来意」と刻んだ精製の別石五輪塔1基を納める。B69の地輪には「慶安元年」（1648）の年記がある。角柱は19世紀前半～明治6年（1874）まで尖頭、唯一の角台頭角柱B55は明治33年（1900）である。B56～58の基礎は断面台形である。

ソ. 甘糟備後守景継（B54）

甘糟景継は謙信・景勝の重臣で、文禄2年（1593）に酒田城、慶長3年（1598）会津時代には白石城の城主をつとめた。米沢藩では侍組に列し、知行6666石余を得た。慶長16年（1611）に亡くなった。石柵に囲まれた墓地で、東面する万年堂が1基ある。中には一石五輪塔2基を納める。柵の外に後年に立てられた材木石製の標柱には「米沢移住元祖備後守甘糟景継夫妻之墓」とある。

タ. 新津左近（B53）

甘糟墓の西に東面して単独で立つ笠付板状墓。笠は入母屋で妻入りに置く。「于時慶安三年庚寅年 帰空 相岩良禪 定門靈位 七月廿三日」（朱文字）とある。基礎は蓮華座を持つ。

チ. 富所家（B48～52）

林泉寺墓地の南西隅に位置し、基壇上に5基の万年堂が東面する。長尾家に仕え、勝重～定重まで五代が伯耆守を名乗ったことから「富所五代伯耆守」といわれる。B49の一石五輪塔には墨書で年号銘がある。

ツ. 北越戦争忠士（B166）

A地区の北側に角柱1基（明治元年）が単独で建つ。戊辰戦争にかかる北越戦争で亡くなった米沢藩総督色部長門はじめ、280余名の遺髪を埋めた供養塔である。

テ. 草間家（B156～160）

墓地は直江墓参道の北側で東面し、万年堂5基のみで構成される。B157には別石五輪塔が1基、B159には一石五輪塔が

2基入り、うち1基は双子の作りとなっている。

#### ト. 吉江家(B131~137)

上杉家譜代の重臣吉江家の墓地。侍組に属し、吉江長忠(300石) - 長次と続いた。直江墓参道の北側で東面し、墓標はコの字形に配置される。五輪塔1基、角柱3基、有像2基、自然石舟形1基の7基がある。梵字を刻む凝灰岩製の別石五輪塔以外は近代のものである。

#### ナ. 滝川喜六(B169)

A地区墓所の入口手前の右脇にある。明治4年1月、興譲館内で洋学舎を創設した際に招かれた静岡藩士の英語教師。来沢間もない明治4年4月に亡くなった。

### (3) C地区の家臣団墓地

現在ではほとんどの区画が盛土と土留めの切石により基壇状に整備されており、旧状を留める墓地は少ない。

#### ア. 畠山家(C34~51)

能登畠山氏に源流をもつ高家衆である。A地区北東部の鉤折れのエリアに北面する。中央に参道があり、東に笠付板状墓、西前列に万年堂、後列に板状・角柱が整然と並ぶ。平成20年、十八代畠山家当主によって墓地が整備され、南正面に「畠山氏先祖累代之墓」と歴代の戒名を刻んだ墓誌がある。

米沢畠山氏は景勝の姉が嫁いだ上條(畠山)弥五郎義春(寛永2年没)の子景広が景勝に仕えたのが始まりとされ、その子政利が慶安5年に京都から米沢に移り、500石の高家衆として仕えた。政利は万治2年(1652)に亡くなっている。東列南端に笠付板状墓C50が立つ。

墓標は万年堂6基、笠付板状5基(特殊板状1基含む)、板状3基、角柱2基、その他2の計18基からなる。東列は政利以下17世紀代後半の大型の板状墓である。C48のみ入母屋の笠が残る。

西列の万年堂は1尺5寸タイプの小型品が並ぶ。C45は格子窓の外周を一段低く削り出す珍しい加工をしている。C41には一石五輪塔が3基、C40は2基のうち1基が精製品である。後列ではC39が明治38年(1805)、C38が明治41年(1808)で角台頭角柱となっており、その普及時期を示している。

#### イ. 長尾景貞家(C32・33)

長尾家の北にあり、角柱1基、自然石1基からなる。C33は明治28年(1895)銘で蓮華座・猫足をもつ角台頭角柱。棹石の南側面に「長尾景貞之墓」とある。

#### ウ. 朝岡家(C10~24)

C地区北側にあり、墓地は西面する。万年堂5基、板状6基、角柱5基の16基がコの字形に配置される。東正面中央に昭和7年(1932)の花崗岩製の角柱墓を置き、北には万年堂、南に板状、角柱を2列に置く。

最も大きい万年堂C14には精製の別石五輪塔が1基入る。板状は天保3年(1832)、嘉永元年(1848)、明治2年(1869)がある。ただし、19世紀後半頃には板状で頭部が尖頭のもの、角柱で櫛形のものがあり、棹石の断面形と頭部形の関係が不安定な時期とみられる。

小貫氏の写真では基壇ではなく、地面に直接基礎が置かれ、周囲に玉石の列石が巡る(第16図)。C10はもっと西の位置にあり、C11との間にもう1基小型の万年堂があった。C13は今と90度向きが異なっている。基壇の整備にともなって基礎石は新材に取り替えられ、墓標は整理、再配列されたことが分かる。

#### エ. 二本松家(C55~66)

二本松家は畠山家の分流で、高家衆の一角を占める。畠山家の東にあり西面する。中央に花崗岩製の角柱(平成8年製)を置き、北に中型万年堂、笠付板状墓を置き、南に角柱等をコの字形に配置する。万年堂2基、笠付板状1基、板状3基、角柱6基の計12基からなる。C58は向唐破風の笠がのる。万年堂C59には泥岩質の一石五輪塔1基が入る。火輪には「西」が白く見えるので、「祖師西来意」と書かれていたらしいが、ほかは薄くて読めない。顔料は不明である。C62は近年再建された角柱で年号はない。

#### オ. 福島家(C67~80)

墓地は南面し、万年堂1基、板状5基、角柱5基、自然石3基の計14基からなる。尖頭角柱C68は側面に明治10年の銘があるものの、書体から後刻の可能性がある。C75は文政2年(1819)の板状、C76は文化11年(1814)、C71は天保年間の尖



第16図 古写真に見るA地区北門  
米沢市上杉博物館蔵 小貫幸太郎氏撮影

頭角柱である。C78は明治14年（1881）の櫛形角柱である。C72は昭和7年（1932）の角台頭角柱である。19世紀代は棹石の断面形と頭部形態が錯綜している。自然石C73・C77、板状C79は倒壊している。万年堂C80には泥岩質の一石五輪塔があり、火輪に墨書文字が見える。

カ. 福島家（C81～88）

中央に花崗岩製「福島氏之墓」があり、南に向いてコの字形に配置されている。有像1、板状5、角柱2の8基からなる。前項の福島氏の墓地も含め板状、角柱では正面に男女戒名を並列し、両側面にそれぞれ年月日を刻むのが一般的である。文政5年（1822）のC88は板状（櫛形）であるのに対し、明治元年（1868）のC84は尖頭角柱となる。

キ. 松木家（C89～92）

墓地は西を向き、基壇上には中大型の入母屋平入万年堂3基と昭和7年造の大型の自然石墓標1基（松木彦左衛門累代之墓）を置く。松木彦左衛門家と仮称する。C89は赤湯秋葉山に私塾臨雲亭を開いた漢学者松木秀実（魯堂、1785～1838）の墓とされ、前面に赤色凝灰岩製の灯籠一対（天保9年銘）を置く。中央の万年堂C90には「寛永元年」銘の一石五輪塔が納められる。C89の一石五輪塔とともに泥岩質の石材を用いている。C91の一石五輪塔には地輪に戒名が刻まれる。寛永元年（1623）が制作年代とすれば、一石五輪塔でも古式の部類に入る。

ク. 松木家（C99～103）

上記墓地の南にあり、万年堂5基が西面する。中央に大型、南北に中型を置く。すべて入母屋平入で胴内には2基の一石五輪塔を埋納する。C99は一石五輪塔2基とともに仏像一体を安置する。C100の1基は墨書き持ち、もう1基には刻字に金が入る。C101の1基には濃赤の顔料で文字が書かれている。

ケ. 吉川家（C113～116）

C地区家臣団墓地の最南端にある。南に面し、花崗岩製角柱（昭和52年造）の西側に自然石2基、東に万年堂1基の計4基からなる。万年堂は吉川惣（総）兵衛の墓と伝えられる。惣兵衛は直江兼続が慶長9年に、泉州の松右衛門とともに100石の知行を与えて招いた鉄砲師である。自然石C113、114はそれぞれ寛政11年（1799）、文化3年（1806）の銘がある。万年堂の中には一石五輪塔2基が入る。

コ. 秋山家（C93～95）

松木家の東側に北面する3基がある。中央に万年堂1基があり、両脇に角柱が2基ある。東は昭和16年造の花崗岩製角

台頭角柱である。万年堂C94は「謙信公股肱の臣秋山源蔵の墓」と伝える。中には2体の仏像を陽刻した石造物が納められている。

サ. 小田切家（C2～4）

C地区の北端にあり、南面する。中央に「小田切氏累代」と書かれた花崗岩製角台頭角柱（昭和30年）があり、西に万年堂1基、東に五輪塔1基がある。万年堂C2は元禄3年に生まれ、絵画や作庭に才を發揮し、安永3年（1774）に亡くなった小田切随親（「小田切寒松軒」）の墓と伝える。泥岩質の一石五輪塔1基が納められている。C4の五輪塔は空風火輪を一石で作る。地輪に朱の入った梵字の存在を確認できる。

シ. 朝岡家（C5～7）

小田切家の東にあり南面する。中央に明治36年（1903）、花崗岩製の角台頭角柱があり「上杉家臣朝岡家之墓」とある。西には万年堂1基、東に自然石1基がある。自然石C7は文政5年（1822）の年号銘がある。

ス. 坂蘭渓（C1）

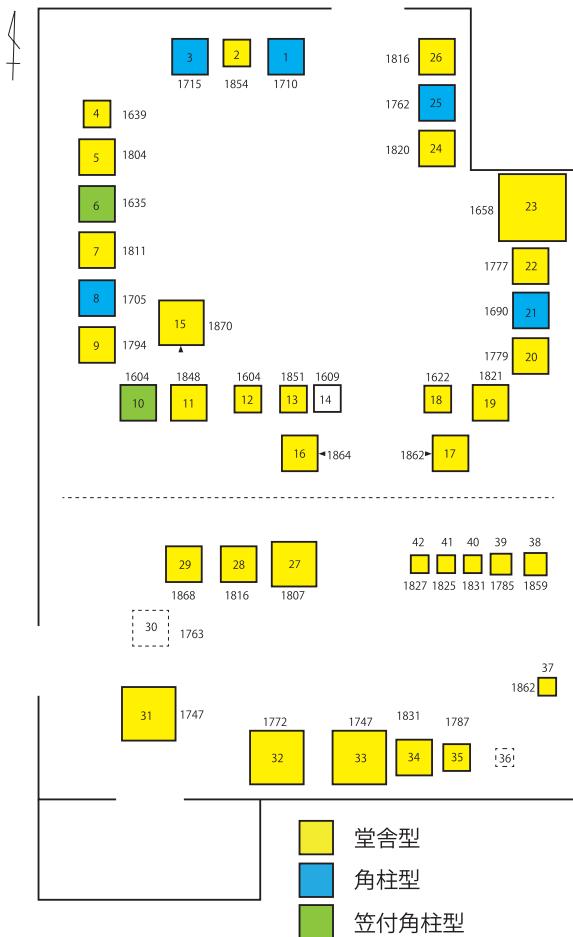
坂敬次は明治維新当時の漢学者で米沢中学では教師をつとめた。『蘭渓詩集』を残し、明治22年に亡くなった（菊池1983）。墓標は北面する角柱状の櫛形墓で蓮華座を持つ。側面に没年月日と「坂蘭渓之墓」と刻む。

## 4. 考察

### （1）上杉家墓所の墓標形式と年代

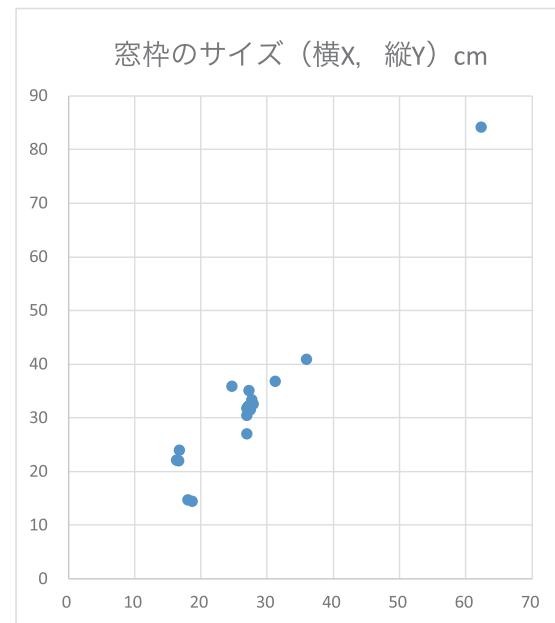
17世紀初頭～半ばに亡くなった7人の墓標の種別を見ると、堂舎型4、笠付角柱2、不明1となる。このうち、A10笠付角柱（菊姫）とA12堂舎型（四辻夫人）は注(2)に示した通り没年当時のものではない。A10菊姫（1604）とA6市姫（1635）の笠付角柱は同一型式であり、両者は近い時期に造立された可能性がある。堂舎型ではA18景勝実姉（1622）、A4定勝子（1639）が没年から古式とみられる<sup>(5)</sup>。A23媛姫（1658）は胴幅が115cmを測り、規模、建築意匠とも傑出した存在となっている。

元禄3年（1690）～宝暦12年（1762）の約70年間に建てられた藩主家の墓標5基はすべて角柱型である（第17図）。一方、安永6年（1777）以降はすべてが堂舎型となり、延享4年（1747）から造墓を開始する駿河守家も現存する14基すべてが堂舎型となっている。すなわち、17世紀代は上杉家として墓標型式は定まっておらず、堂舎型が定着するのは18世紀半ば以降ということになる。



堂舍型ではA4(1639)、A12(1604)、A13(1851)の胴と基礎は類似している。胴は45cm四方、正面の透かし窓は22×16cm、縦長3×2列の格子窓が入るサイズである(第18図)。基礎は蓮華座をもち、正面に文様が入る。A18(1622)は基礎が近年交換され、当初の姿は不明ながら、胴のサイズや作りは類似している<sup>(6)</sup>。窓は横長2×3列のサイズである。A4、A12は基礎が1段で、A13は基礎の下に2段、A18は1段の台が付く。笠はA4、A18は宝形AでA12、A13が宝形Bである<sup>(7)</sup>。A12は寛永6年(1629)の改葬後に設置されたとみられるので、このタイプの胴と蓮華座を持つ基礎は17世紀前半代に属する可能性がある。ただし、A13が嘉永年間のものであり、その理由はわからない。

米沢は豪雪寒冷地であり、墓標の倒壊や凍結破碎による傷みが避けられない。地震による倒壊も経験している。また、墓所の整備等によりいくつかの墓標をまとめて製作し、置き換えた可能性も否定できない。墓標型式の編年には石材の詳細な観察を踏まえ再検討が必要である。



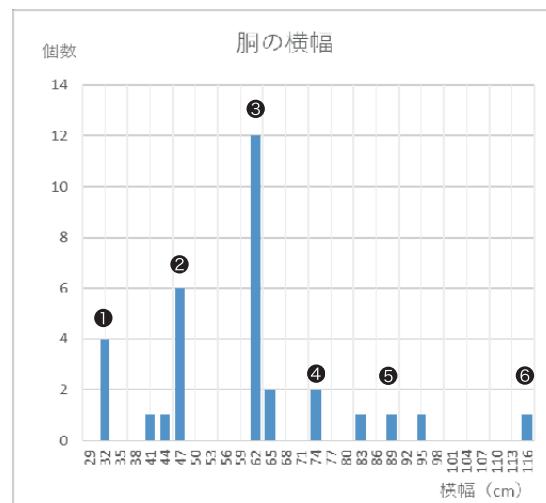
第18図 堂舎型の窓枠のサイズ

## (2) 堂舎型の大きさと加工

堂舎型32基のサイズと規格性を検討する。胴は正面幅と奥行き幅が等しく、幅1~2尺サイズでは高さが1~2寸長い。ここでは胴正面幅でサイズを代表させた(第19図)。度数分布図から①1尺、②1尺5寸、③2尺、④2尺5寸、⑤3尺、⑥4尺の6サイズに分けた。

2尺の③が14基と最も多く、全体の44%を占める。①~③で全体の81%を占める。⑤の3基はいずれも駿河守家で規格性に乏しい。

堂舎の大きさと被葬者の年齢との関係をみる。戒名により成人と童子、童女とある子供の墓標をみていく。成人の墓標は③のサイズが最も多いのに対し、子供は①~③と相対



第19図 堂舎型の胴の横幅

的に小さいことが分かる（第20図）。子供の墓標14基を本家と分家（駿河守家）にわけてみると、前者のほうが相対的に大きいといえる（第21図）。一方、成人墓では本家は11基中7基が③サイズなのに対し、分家では7基中、③が3基、④が1基、⑤が3基と相対的に大きい。これは本家の成人墓が正室、側室等の夫人に限られるのに対し、分家は弥五郎家初代～3代など男性が主体を占めるからであろう。米沢藩主家と分家との間でのサイズの規制はなかったとみられる。

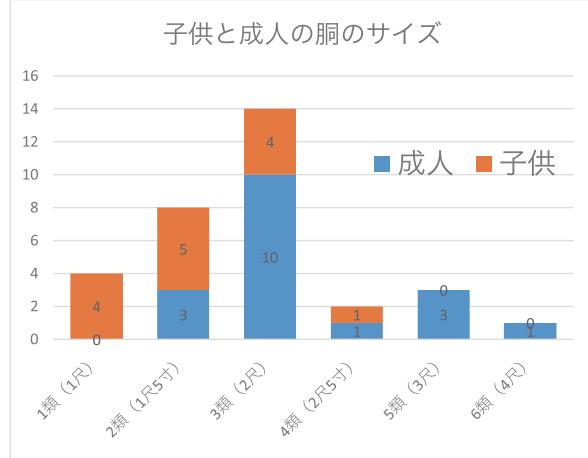
加工では、胴の背面にも柱や土台・梁を表現するもの（A）と省略するもの（B）がある。サイズとの関係をみると、①～③では加工を省略する傾向があり、大型のものは意匠表現も丁寧なことが分かる（第22図）。③のなかで背面加工があるのはA20（1779）、A22（1777）でともに藩主の子である。一方④で背面加工のないA15は明治3年（1870）で最後の墓標になる。

本家の堂舎型には木製の格子窓が嵌め込まれている。これは近年の祭典の際に整備されたもので、小貫幸太郎氏の写真では格子窓はないか、枠目の粗いものが嵌め込まれている。創建当時の姿は定かでないが、方形窓の切り口に棟止めの加工をもつものがあるので何等かの木製品があったことは間違いない。上下2辺にあるもの（A）、4辺に突起状にあるもの（B）、ないもの（C）に分けられる。Bは4隅にあるもの、4辺中央に4か所あるもの、上下2辺の中央にあるものがある。サイズとの関係でみると、Aタイプはサイズ③が1例、④が3例、Bタイプはサイズ③が3例、④が1例、Cタイプはサイズ①が5例、②が7例、③が11例となる。Aタイプ4例はいずれも駿河守家で年代が1747～1807年、大型のものに限られている。Bタイプは本家3例、駿河守家1例で、年代が1862～1870年、すなわち幕末～明治初頭に限られる。この加工は一定のサイズにおいて、年代や石工集団を示す要素とみられる。なお、A34には唯一古材の外枠が残っている。

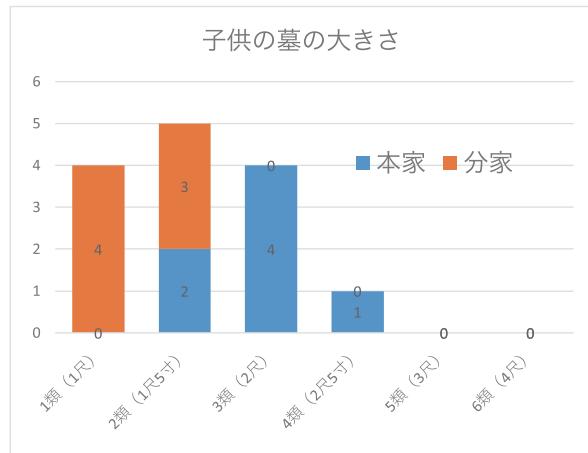
### （3）家臣団墓地の墓標の配列と墓域の形成

家臣団墓地は米沢藩主上杉家と駿河守家墓所であるA地区の東西（B、C地区）に分かれ、西に武田家、東に畠山家とそれぞれ有力な高家衆が脇を固める配置を取る（第5図）。この基本配置は各墓地での墓標の出現年代とその連続性からみて、林泉寺が当地に来たとされる元和3年からさほど遠くない時期に出来上がり、江戸期を通して踏襲されたと考えられる。A地区の北入口付近で東西に分かれる現在の参道も各墓地の正面性を見る限り、近代に新たに整備されたというより江戸期のものを踏襲していると考えて矛盾はない<sup>(8)</sup>。

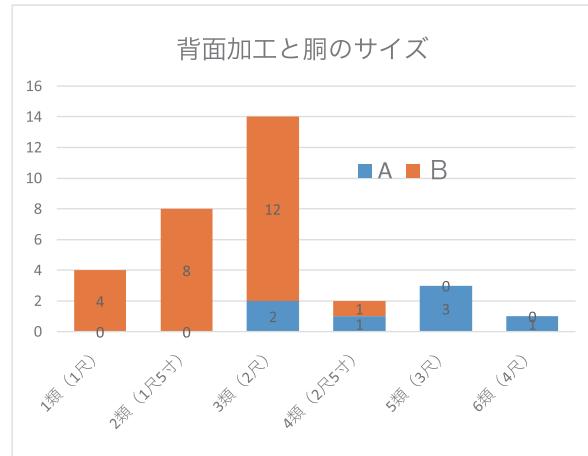
家臣団墓地はコの字形配置をとる例が多く、各墓地では正面性が高い。特に万年堂の横一列の配置が目立つ（鐵家、近藤家、富所家、畠山家など）。B、C地区とも列状配置は南北



第20図 子女の墓のサイズ



第21図 子女の墓標にみる本家・分家とサイズ



第22図 堂舎型の背面加工と胴のサイズ

方向に限られ東西に長く延びるものがない。コの字形配置には2種があり、各家の始祖を正面中央に祀り、左右両袖を手前に長く伸ばすタイプ(武田家、畠山家)、正面中央から左右に並べるタイプ(鐵家、福島家、朝岡家、松木家)がある。後者は藩主墓の配置原理にも通じる。近代に入ると大型万年堂に代わって花崗岩製の角台頭角柱「○○家之墓」を置く例が増えてくる。

このような2タイプの配置が墓域形成時から計画的されていたかどうかはわからない。ある段階でシンメトリーを意識して再配置された可能性は否定できないからである。基壇状の施設を持たないB地区長尾権四郎家や三股家、C地区福島家の配置ではコの字形を志向してはいるものの配列の規則性は高くはない。当初から基本原理として始祖を中心祀る配置はあったと考えるが、現状は近代以降の墓地整備の影響を受けている可能性を考慮しておく必要があろう。

C地区はA地区の東辺に沿うように、朝岡家から畠山家、二本松家、松木家の前を通って南へ至る。これに対してB地区は、武田家や長尾権四郎家の南側、A地区の西側を大きくあけている。直江墓参道の両脇と直江墓の南に延びる参道の西側に墓域の形成が限られており、参道に面して帶状に連なる景観をみせている。墓地の配列がブロック状となるのは近代の墓地の拡大以降であり、近世までは比較的単純な配列だったといえる。

B地区西辺の墓地は間口が5~6間程度である。江戸期に造られた万年堂列を単位としてみると、B地区では北から、三股家、直江家、鐵家、近藤家、富所家と続く(第5図)。これに対して、間口3間程度の一回り小さな墓域がある。B地区草間家、長尾家、C地区二本松家、福島家である。敷地があらかじめ家ごとに決められていたのか、墓標の数によって結果としてそうなったのかは不明であるが、基壇を持たないB地区長尾権四郎家や鐵家のコの字形配置を見ると、シンメトリーではなく形成途上のように見える。その範囲内で中央に始祖を祀るような一定の配列規則に基づき順次墓標を造立していくのではないか。そうであるなら基壇上に再整備されている武田家等の配置パターンもあながち後世の作成とは言えないだろう。小貫氏の写真と比較すると、墓標の倒壊や破損によって撤去されたり、墓地整備により、基礎の取り換え、再配置はあるものの、配置パターンという点では過去のものを踏襲している可能性が高い。

#### (4)五輪塔

凝灰岩製の別石五輪塔は5基と少ない。大型品はいずれもB地区にあり、武田家1基、長尾権四郎家2基、吉江家1基である。武田家と長尾権四郎家の3基の17世紀半ば~18世紀前半で五輪に「祖師西来意」、地輪に戒名と没年を刻む。限られた数しかなもの、上杉家高家衆筆頭の武田家、侍頭の長尾家で使用されており、家臣団の中でもその採用に一定の制限があったのかもしれない。

#### (5)万年堂

ここでは直江兼続・おせん墓も含めて検討していく。対象とする墓標は93基あり、内訳はB地区67基、C地区26基である。

まず、胴正面の形状は、高さデータのある87基でみると平均は100.9(幅/高さ×100)となり、正方形であることが分かる。大きさの分布をみるために、胴の横幅×高さ、奥行きの寸法を計測し、グラフに示した(第23~26図)。ヒストグラムをみると幅、高さとも70cm以上と未満では断絶がある。幅は大きいものから4尺サイズのB89鐵泰忠、B130三股吉親、3尺サイズのB41長尾家、直江夫妻B114・115がある。群を抜いたこの5基を4L、3Lサイズとしておく。

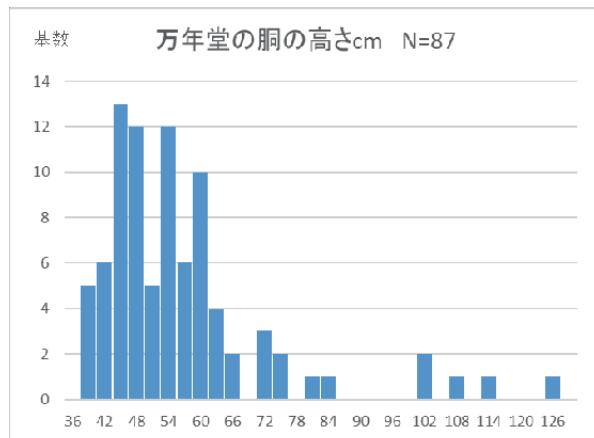
大型として2.5~2.7尺の6基があり、2Lサイズとする。B69・70近藤家、B54甘糟景継、C14朝岡家、C90松木彦左衛門家、C101松木家である。ほとんどが墓標群の正面中央に設置されるように、各家の始祖にあたる人物の墓とみられる。

幅2尺前後(58~64cm未満)をLサイズ、1.8尺前後(約50~57cm未満)をMサイズ、1.5尺前後(39~49cm未満)をSサイズとする。この区分に従うとLが21基、Mが24基、Sが37基となる。

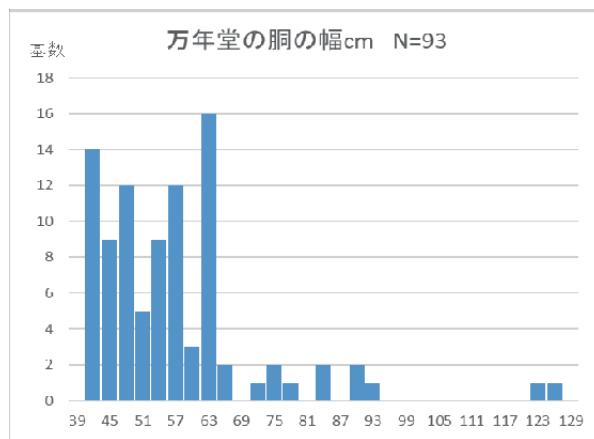
胴正面の格子状の透かし窓は3(縦)×3(横)88基の正方形配列が基本である。直江墓と窓が欠落している杉原墓を除くと例外は2基しかない。B130(三股吉親)が3×4、B89(鐵泰忠)が4×4で4Lサイズの2基が該当する。3LサイズのB41(長尾権四郎家)と2LサイズのC11(朝岡家)は3×3であるが、透かし穴が縦長方形となる。

笠は寄棟が15基あり、すべて平入りである。入母屋が72基あり、妻入りが2基あるほかは平入である。B41長尾権四郎家、B89鐵泰忠墓の3L、4Lサイズである。宝形は6基あり、直江墓を除くと4基中3基が武田家に集中する。

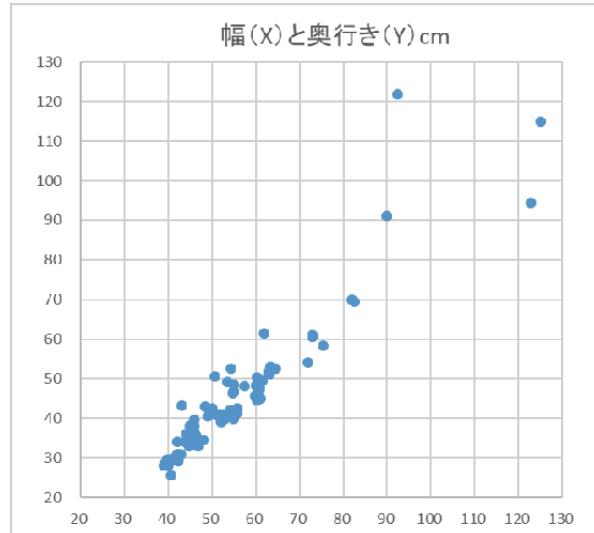
寄棟15基中、Lが3基、Mが3基、Sが9基(60.0%)でSの割合が高い。入母屋は72基中、2L以上が9基(12.5%)、Lが17基



第23図 万年堂の胴の高さ



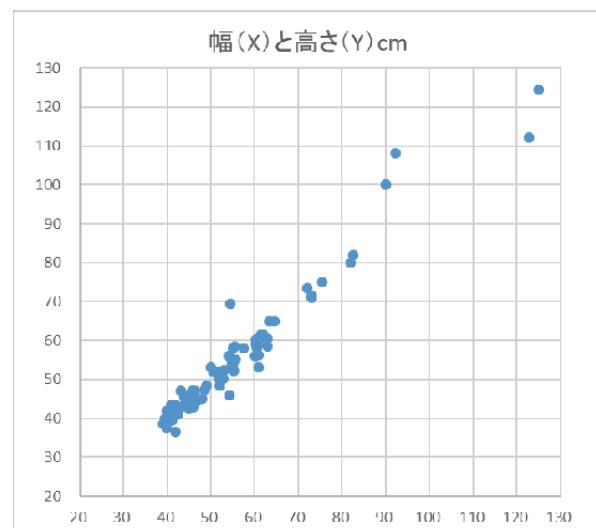
第24図 万年堂の胴の幅



第25図 万年堂の幅と奥行き

(23.6%)、Mが19基(26.4%)、Sが27基(37.5%)となる。すべてのサイズに分布しているが、2L以上の大型品ではすべて入母屋造りであることが分かる。

入母屋や寄棟では大棟の断面が角ばったもの(平棟)と丸



第26図 万年堂の幅と高さ

みを持つもの(丸棟)がある。寄棟では15基中、平棟が5基、丸棟10基と後者が2／3を占める。一方、入母屋は平棟52基(72.2%)、丸棟19基(26.4%)、不明1基(1.4%)と、平棟の割合が高い。

入母屋・丸棟の中には、寛永元年(1623)、正保3年(1646)、慶安元年(1648)、天和3年(1683)と17世紀代の紀年銘を持つものがあり、丸棟は相対的に古い形態の可能性が高い。

胴内に納める五輪塔には別石五輪塔、一石五輪塔、その他がある。石堂タイプでも堂舎型と違うのは複数の五輪塔を納める例が多いことである。現状で約25基を確認している。初期には個人墓だったものが次第に夫婦等、複数の供養塔を納めるようになっていくという見通しをもっている。2Lサイズ以上の万年堂では別石五輪塔の精製品を納める傾向がある(B41・69・70・89・114・115・130、C14)。年代は17世紀代とみられるが、これらの分析は今後の課題としておきたい。

万年堂の新しい年代は、文久2年(1862)、明治14年(1881)銘から明治期に下る可能性もあるが、ともに胴外面への追刻であり、その終焉は定かではない。

## (6) 笠付板状ほか

特殊な頭部をもつC46も含め、背の高い板状墓標を一括した。B地区4基、C地区6基、計10基ある。現在も笠が残るのはB53新津左近、C48畠山家、C58二本松家と3基のみである。

年代のわかる9基中8基が17世紀代のものであり、江戸前期の形式であることが分かる。B地区では福島家2基、鐵家1基、新津左近1基、C地区では畠山家5基、二本松家1基と特定

の家に集まる傾向にある。本形式はB93  
鐵家が男女を併記するほかは、1名のみを  
記す個人墓である。本形式は17世紀代に  
特定の家における個人墓として造立され  
たものであろう。

#### (7) 板状・角柱

今回調査したB・C地区では板状墓標が  
41基(B:18基、C:23基)、角柱状墓標が84  
基(B:44基、C:40基)ある。これにA地区  
の板状3基、角柱15基を加えると、合計で  
板状44基、角柱99基となる。板状と角柱状は棹石の横幅と奥  
行きの比が0.75以上で便宜的に区分した。

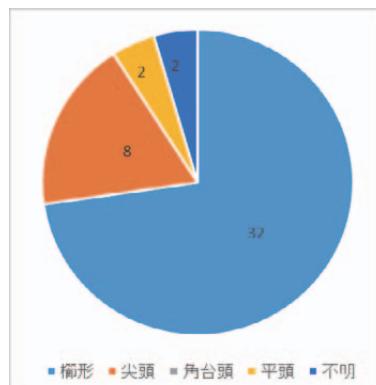
板状で年代を読んだものは16基(34%)ある。天正11年  
(1583)の可能性がある1基を除くと、寛政5年(1793)から文  
化、文政、天保、嘉永、慶応、明治2年(1869)と続き、間があいて  
明治25年(1892)、明治41年(1908)大正3年(1914)がある。  
データ数が少ないものの19世紀には一般的な墓標形式だった  
ことが分かる。

頭部形態は櫛形が32基、尖頭が8基、平頭が2基、不明が2基  
である(第27図)。本形式は一般に「櫛形墓」と称されるよう  
に櫛形頭部の割合が高い。尖頭が一定量あるのは角柱との  
境界があいまいであることを示す。これらは棹石が肉厚で  
横幅と奥行きの比が0.75を超えている。

角柱で年代のわかるものが75基(76%)ある。A地区では  
江戸期のものが5基あり、元禄3年(1690)～宝暦12年(1762)  
と造立時期が限られる。近現代では、明治27年(1894)～昭和  
10年(1935)が7基、そして近年建てられた3基がある。B・C地  
区で江戸期のものは8基あり、安永6年(1777)を嚆矢とし、文  
化、天保、慶応と続く。明治に入ると数を増し、大正、昭和、平  
成と続く。

頭部形態は角台頭52基、尖頭38基、櫛形3基、平頭4基、不明  
2基である(第28図)。年代の分かる尖頭は17基あり、安永6年  
(1777)～明治22年、角台頭は明治18年(1885)が古く、尖頭と  
置き換わる。櫛形3基はいずれも明治年間である。このこと  
から角柱は江戸期の尖頭から明治半ばごろに角台頭に変わった  
ことが分かる。

板状墓標は明治41年造のA14を除くといずれも凝灰岩製  
である。角柱の凝灰岩製は昭和28年(1953)が最も新しい。明  
治36年(1903)から花崗岩が登場し、昭和30年以降は凝灰岩  
の角柱は見られなくなる。



第27図 板状墓標の頭部形態



第28図 角柱状墓標の頭部形態

板状墓・角柱墓では戒名が正面に刻まれるが、一人だけの  
ものと、居士と大姉等、男女が併記される例がある。近代に  
入ると「○○家之墓」と家族墓の表記に変化していく。これ  
ら戒名等の分析は今後の課題としたい。

笠付角柱はA地区に3基、B地区に1基ある。A10が景勝正  
室菊姫とA6が定勝正室市姫のもので17世紀前半代のもの  
である。ほかの2基は現代のもので、A52が昭和47年(1972)、  
B172が昭和54年(1979)のものである。後者は花崗岩製である。

#### (8) 自然石

自然石の墓標は27基ある。うち享保20年(1718)～明治6年  
(1873)の江戸～明治初頭の墓標は14基と少ない。昭和初期  
になると大型の自然石の片面を切断研磨した「○○家之墓」  
が登場し、10基を数える。数は少ないが柱状節理の材木石を  
利用した石標(B54標柱、C54、C121)も存在する。

### 5.まとめ—墓地と墓標にみる階層性

ここまで上杉家墓所と家臣団墓地について、墓域・墓標の  
形成過程や墓標各形式の形態、年代の分析を行ってきた。

墓地・墓標は一般に家や被葬者の生前の社会的・政治的地位  
、宗教等を反映する。今回の調査はあくまでも地上部に相  
当する墓標の調査である。しかし、多様な墓標形式が一定の  
身分秩序を反映していることはある程度明らかにできたと  
考える。

藩主墓所は初代景勝から七代重定まで火葬とし、入母屋  
妻入りの御堂の中に大型の別石五輪塔を祀る。八代治憲か  
ら十一代斉定までは土葬とし、宝形造りの御堂に祀られる。  
藩主の夫人や子女を祀るA地区では藩主廟の木造堂舎を石

造に写し変えたと考えられる。堂舎型の石堂内に一石五輪塔あるいは別石五輪塔を祀る形態が林泉寺では最上級の墓標形式だった。堂舎型では成人が子供より相対的に大きめのサイズに祀られたが、藩主夫人よりも米沢新田藩主（駿河守家）の男性のほうが大きな傾向にあった。最大は綱勝の正室媛姫（会津藩主保科正之娘）のものである。これとは別に景勝正室菊姫（甲州夫人）や定勝正室市姫（鍋島夫人）は笠塔婆（笠付角柱）を採用しており、江戸初期には出自により区別された可能性があろう。上杉家のみに用いられた形式である。17世紀末（1690）～18世紀半ば（1762）に限って角柱が採用された理由はわからない。一方、角柱では「尖頭」という頭部形態が17世紀に遡る形態だということが明らかである。

次に直江夫妻の墓地では堂舎型と万年堂型の折衷的な石堂が採用されていた。その形式やサイズからは家臣団とはいえ別格の扱いが感じられる。現在の墓地は大正8年の300回忌法要の際の整備によるもので、それ以前の写真から明治末の姿が分かるものの、何度かの顕彰過程を経ている可能性があって原形はわからない。

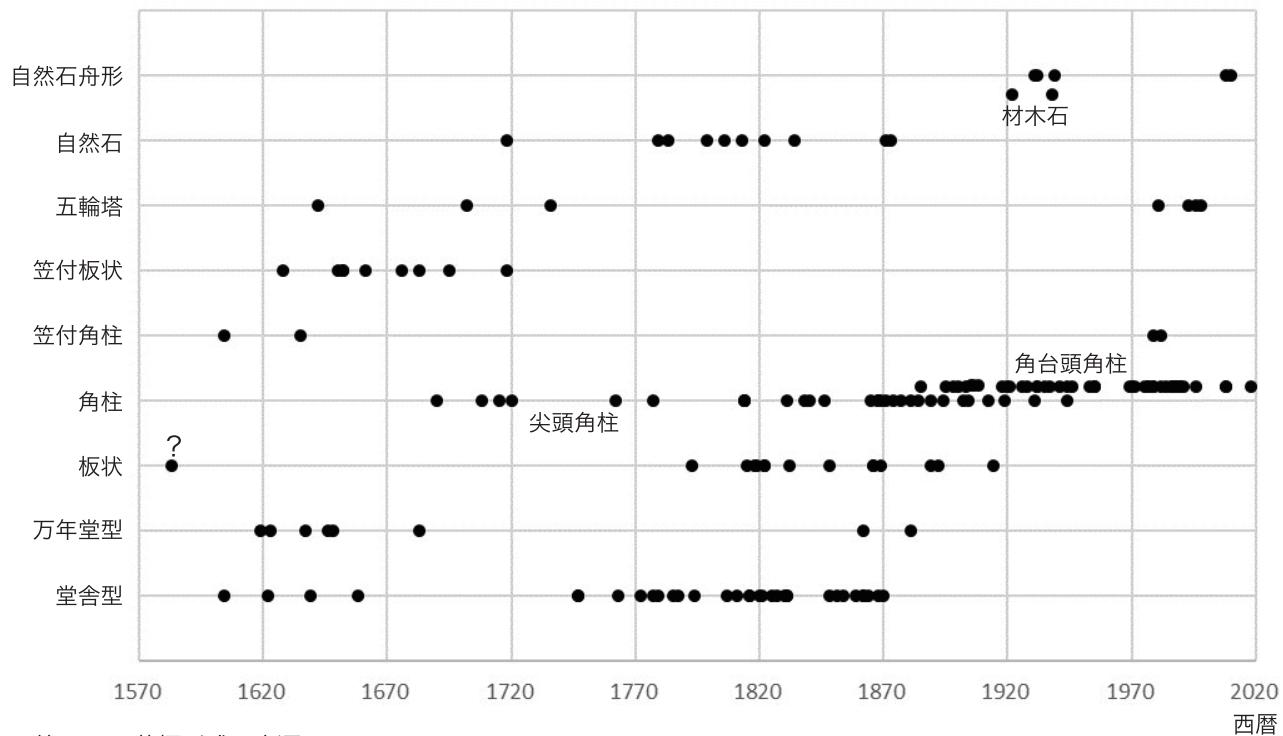
17世紀代の有力家臣の墓標には大型五輪塔、笠付板状（笠塔婆）、2Lサイズ以上の大型万年堂がある。家により採用する形式が異なるものの、いずれも始祖の扱いを受けて、墓域形成の中心的位置を占めていた。笠付板状（笠塔婆）墓は家

臣団墓地のみで採用されており、A地区にはない。

板状（櫛形）墓や尖頭角柱墓はともに18世紀後半～末に出現しており、19世紀に入ると増加する。このようしたことから、家臣団墓地では17～18世紀代は、万年堂が中心的な墓標形式だったと考えられる。年代的な検討ができるものの、一石五輪塔を2基納める例が多いことから次第に夫婦墓という形態が一般化していったとみている。万年堂のサイズは緩やかではあるが規格性が認められ、士分や家禄の差を反映している可能性がある。ただ、2Lサイズ以上のものは17世紀代が中心とみられ、以後は幅2尺のLサイズ以下に標準化していったものと考えられる。万年堂の終焉は不明ながら、18世紀後半から板状墓、そして角柱墓が増加していく、墓標形式やサイズにみえる階層差は縮小に向かったのではないか。19世紀になると男女2名の戒名と年号を刻むものが増える。

明治になると角柱が優勢になり、明治半ばからは角台頭角柱に収斂していく。花崗岩は明治30年代後半から利用が始まり、大正期、戦前に普及し、戦後は凝灰岩を完全に駆逐していった。

本稿は現地調査が完了していないため冒頭に記した通り中間報告的な内容に留まった。課題は非文字資料では墓標の形態的特徴、製作技法や石材の観察、寸法計測があげられ、文字資料では戒名の読み取りと表記パターン等の分析、



第29図 墓標形式の変遷図

過去帳との対比、各時期の分限帳による禄高・土分との関係などがあげられる。

上杉家では藩主墓所を筆頭に、夫人や子女、武家の墓地が城下寺院に分散する。林泉寺墓地の分析により、米沢藩のヒエラルキーと墓標が一定の対応関係にあることを確認した。林泉寺には直江兼続夫妻墓をはじめ、高家衆筆頭の武田家、次席の畠山家、上杉家譜代の長尾家等、有力な家臣の墓地が比較的まとまっている。林泉寺墓地は米沢藩主上杉家の身分秩序や墓制を知る上で貴重な情報を有しており、さらに明治以降も継続している点は近代の葬送・祖先信仰を知る上でも興味深い。武士の末裔や住民たちが家祖や先祖をどのように顕彰し、地域、家族のアイデンティティとしてきたか。今回、江戸期のみならず近代の墓標も調査対象としてきたのは、このような問題の検討にも価値があると考えたからである。

米沢の冬から早春の天候は凝灰岩墓標には厳しい環境である。雪による墓標の倒壊、笠の脱落、凍結破碎による劣化、文字の風化は現在も進行している。城下町米沢の情報源の宝庫である墓標の基礎調査と保全は地域の文化財保護の喫緊の課題といえよう。

本稿は調査参加者が分担してデータ整理、原稿執筆を行い、北野が取りまとめた。調査にあたり、林泉寺住職菊池道喜氏、米沢市上杉博物館角屋由美子氏、米沢市教育委員会文化課宮田直樹氏にお世話になりました。記して感謝申し上げます。

## 注

(1)謙信はその後真言宗に帰依し、景勝もこれを継いだことから、上杉家は真言宗法音寺(米沢城二ノ丸)を菩提寺とした。長尾家の菩提寺であった曹洞宗林泉寺も上杉家の菩提寺として歴代藩主の位牌を祀っている。

(2)没年と墓標の造立年は必ずしも一致しない。『上杉家御年譜』では慶長9年(1604)に亡くなった菊姫の墓所は京都妙心寺亀仙庵に設けられており、後年に米沢林泉寺にも墓標が建立された。また、慶長9年没の景勝側室四辻夫人が寛永6年(1629)に林泉寺から極楽寺に改葬されたとされ、その後、墓標が再建されたとみられる。

(3)A44は「三侯□寛墓」と刻まれた自然石墓標である。原位置ではなく、いずれからか持ち込まれたものであろう。

(4)別石五輪塔はともに泥岩質の良質な凝灰岩で、兼続墓では梵字を刻むのに対し、おせん墓では「祖師西来意」と墨書されている。兼続墓では地輪に梵字とともに戒名や没年が刻まれる。

(5)A4は全形不明ながら太い円柱状の供養塔を納めており異質である。

(6)堂舎型の笠はA18のように軒先が中央から両隅に向けて緩やかに厚みを増し、隅軒が大きく反るものが古い傾向がある。

(7)宝形Bとしたこのタイプの笠は宝珠が小さく、軒の通りが直線的で厚みがあまりない。これが当初の部材だったかどうかは再検討が必要である。

(8)B地区とC地区の家臣団の振り分けにどのような意味があるのかは今後の課題したい。畠山家の隣にその分家である二本松家を置くように縁戚関係を反映している面もある。

## 参考文献

池上悟・池田奈緒子2015『近世の墓石と墓誌を探る』立正大学博物館

加藤和徳2004「山形県置賜地方の万年堂」『日本の石仏』第112号

日本石仏協会

菊池伸之1983『米沢春日山林泉寺記』(2007改訂)

白石太一郎・村木二郎編2004『大和における中・近世墓地の調査』  
『国立歴史民俗博物館研究報告』第111集) 国立歴史民俗博物館

関根達人2018『墓石が語る江戸時代』吉川弘文館

長谷部善作・藤田守編1976『上杉家御年譜』2(景勝公1)米沢温故会

長谷部善作・藤田守編1976『上杉家御年譜』3(景勝公2)米沢温故会

長谷部善作・藤田守編1977『上杉家御年譜』4(定勝公)米沢温故会

長谷部善作・藤田守編1977『上杉家御年譜』5(綱勝公)米沢温故会

水谷類2009『廟墓ラントウと現世浄土の思想』雄山閣

米沢市史編さん委員会編1991『米沢市史』第2巻 近世編1 米沢市

米沢市上杉博物館2010『特別展 上杉家家臣団』